

【調査報告】

留学生の進路決定に関する調査報告

三 枝 優 子

An Investigation of Career Paths Chosen by International Students
after Graduation

SAEGUSA, Yuko

要旨：文教大学には2005年3月現在170名ほどの留学生が在籍している。越谷キャンパスにある外国人留学生別科では毎年40名ほどの学生が1年間進学のための日本語と関連科目を学んでいる。今回は別科生に対する有効な進路指導を考えるための資料として進路決定に関する調査を行った。具体的にはアンケート調査により、どのような受験意識を持って来日し、来日後どのような基準で進路先を決定していくのか、また受験に関する情報をどこから入手しだれに相談するのかを調査した。その結果、いずれも教師、親、知人などに相談をしながら受験校を決めていくこと、受験校を決める際には自分の希望分野が勉強できるかなどと合わせ、学費や学校の場所など経済的な要因も影響を与えていることがわかった。また、日本語力の高い学生はインターネット等の公共性の高い情報を利用するのに対して、日本語力の低い学生は他人からの情報を多く利用している傾向や、受験生活の満足度が高い学生は教師との相談頻度が高い傾向がみられた。

キーワード：留学生、進路指導、進路決定、相談

1. はじめに

2004年現在60ほどの大学と短大で「大学・大学院または短期大学（以後大学と略称）に留学生・研究生・研究員として入学する者のために、準備教育として、日本語及び日本事情・日本文化その他必要な科目を教育することを目的とした教育機関」¹⁾である留学生別科（以下別科とする）が

設置されている。本学別科もこれにあたり、毎年40名ほどの留学生を受け入れている。別科生のほとんどが日本の大学または大学院への進学を希望する学生である。そのため専任教員との相談も進路に関する内容が多い。2004年度秋学期、進路相談のために筆者の研究室を訪れた別科生は27名であった。相談の具体的な内容は「経済学を勉強したいがどの大学がよいか」「日本留学試験の総合科目を受けていなくても受験できる大学はどこか」という受験校選択に関連する相談から「面接の練習をしてほしい」「書類の書き方を教えてほしい」「過去問題について情報はないか」という受験対策の相談、中には「大学の行き方を知りたい」「この大学のある町の環境はどうか」「受験を考えると不安で」というものもあった。これらの相談は進路に関するものだけで終わらず、今後の学習についてや、アルバイトなどの経済的なことに関する内容へと広がる場合が多い。留学生の相談内容が多岐にわたることは田中（1993）でも指摘されており、留学生の相談現場では「心理相談や教育相談以上に、ソーシャルワーカー的な活動、市民ボランティア的な対応、小中高校並みの生活指導的な対応、ひいては単に日本人の友人としての役割を求められてしまう感も否めない」²⁾と述べている。このような相談にいかに対応したらよいのだろうか。

本研究は別科生が希望する進路を獲得するためには、どのような進路指導が有効かを探るための資料調査として別科生の進路決定に関する調査を行い、その結果をまとめ進路指導に対する考察を行うものである。

2. 留学生の種類と別科生の特徴

文部科学省の発表によると2003年日本に滞在する留学生数は10万人を越え、1983年に政府が発表した留学生受け入れ10万人計画の目標値を達成した。2004年には117,302人と過去最高の留学生数となった³⁾。しかし、留学生と一括りにしても大学院生から大学生、研究生とその所属課程は様々である。

文教大学越谷キャンパスには現在、4タイプの留学生が在籍している。

留学生の進路決定に関する調査報告

タイプ1は学部・大学院留学生で、学部・大学院生として日本人学生とともに学部及び大学院の授業を受講している学生、タイプ2はタイプ1に準じるもので協定校から1年間の交換留学生として来日し、学部と別科の授業を受講している学生、タイプ3は別科生で1年間、大学または大学院進学をめざして別科の授業を受講している学生、タイプ4は研究生で、研究を目的とし、学部の授業聴講や指導教員から研究指導を受けている学生である。これらの学生はみな留学ビザをもち、日本での学習や研究を目的として滞在を許可されているが、その学習目的、環境、問題は様々である。

大学や大学院への進学が目的である別科生への進路指導を考えた場合、就職希望の学部生やすでに研究テーマや指導教官のある研究生と進路指導内容が異なってくる。また、それは日本の高校生とも異なる。留学生の大学入試は特別入試として実施され、日本人高校生と受験時期や内容が異なるからである。一般的に留学生に対する入試は国公立大学では日本学生支援機構が行う日本留学試験を受験後、2月から3月に各大学での筆記試験、面接試験を課すところが多く、私立大学では大学独自のテストのみのところと国公立大学と同様日本留学試験とあわせ独自の試験を行うところがある。時期は早いところで8月ごろから始まり、10月から1月にかけて実施している大学が多く、遅くても2月下旬ごろまでに終わる。日本留学試験は6月と11月の年に2回行われる。別科生が高校生と異なる点は試験そのものだけでなく、特別な場合を除いて保護者はもちろん本人も日本の大学に関する情報が少ない点、そしてなにより多くの留学生が異文化適応と受験生活を同時に進めなければならない点で日本で教育を受けてきた高校生とは異なるのである。

以上の点から別科生の特徴についてまとめると、学部生や大学院生などと同じ留学ビザを持っているが進路指導面ではその目的や環境から他の留学生と異なり、日本人受験生とは情報収集の面、異文化適応という生活面で異なる受験生であるといえる。このような点から別科生に対する進路指導は日本の高校生や学部留学生とは異なった指導が必要だと考える。

3. 本学別科生をとりまく環境

2004年度秋学期在籍する別科生は、中国29名、バングラデシュ2名、韓国1名、台湾1名、ベトナム1名、ミャンマー1名、モンゴル1名の7カ国36名（男18名・女18名）である。年齢は18歳から36歳、平均年齢は約23歳である。日本語能力別のクラスで授業を受けて必修科目14科目30単位、選択科目6単位以上を1年間で修得することが本学別科の修了要件である。クラスは口頭表現、文章表現の発信型授業は5クラスに、精読や聴解などの受信型授業は3クラスに、日本事情などの講義型授業は2クラスに分かれている。また、クラスを基準に別科生を2つのグループに分け、専任教員2人が担任として生活・進路指導を行っている。

本学別科生の特徴的な環境としてアドバイザー制度と本学への推薦入試の存在があげられる。アドバイザー制度とはアドバイザーという別科生の学習、生活に対してアドバイスをする人を各学生につけるという制度である。アドバイザーの多くは別科生の親類、知人、恩師などで日本に精通している日本語力のある在日の外国人または日本人である。一部の学生は母国にいる教員等が現地アドバイザーとなっているケースもある。留学生の問題として取り上げられる異文化適応の問題には情報や相談などにより異文化理解が促進されることが大切であると考え、本学別科では授業や専任教員の指導だけでなく、その役割をアドバイザーにも求めている点が大きな特徴といえる。

次に、受験に関する環境については、本学別科は文教大学の文学部、人間科学部、情報学部、国際学部には推薦枠があり、推薦要件を満たして推薦されれば11月の推薦入試受験が可能だという特徴がある。しかし、その枠は若干名であること、また本学にはない専門分野への進学希望などから他大学を受験する学生も多い。多様な進路選択が可能であるという点も本学別科の特徴の一つと言えよう。

本学別科では2004年10月の時点で36名中33名が日本国内の学校に進学

留学生の進路決定に関する調査報告

を希望、1名が未定、2名が帰国予定であった。

最後に進路指導の具体的な環境について述べる。2004年度の進学指導の大まかな流れは以下のとおりである。

4月 入学オリエンテーション（全学生対象）

日本の大学入試制度の簡単な説明と第1回希望進路調査

6月 学部生懇話会（全学生対象）

学部留学生による学部紹介や自分の受験勉強方法の紹介

7月 面談（全学生対象）及び第2回希望進路調査

後期 面談（希望者のみ）

上記以外にも、「留学生生活」の授業で日本留学試験についてや、推薦書などの各種証明書の発行についてなど折に触れ進学に関する情報を与えている。また、その他の授業科目でも入試の過去問題を扱うなど試験科目、内容についての情報を与えている。筆者の主な担当はもう1名の専任教員とともに全学生対象のオリエンテーションと懇話会、そして面談である。面談は基本的に一人で行い重要なことは他の専任にも報告している。

進路指導担当者として、学生の相談にはなるべく明快に正確に対応して行きたいと考えているが、相談内容は多岐にわたりすべてに十分に対応できていないのが現状である。様々な要因が絡んでいる留学生の進路指導はどのように行うべきであろうか。先行研究に留学生の相談相手と相談内容に焦点をあてた大友（1998）や心理学的側面から就学生のアイデンティティを見た井上（1998）などがあるが、留学生の具体的な進路選択や進路指導について言及した記述は今回筆者が探した範囲では見当たらなかった。

そこで、本研究では独自に以下のような調査を行い進路指導への手がかりを得ようと試みた。その結果、次の6点が明らかになった。

- 1 別科生は来日前にどのような受験意識をもっているのか
- 2 進路（受験校）を決定する基準は何か
- 3 進路を決定する際どこから情報を得ているのか
- 4 進路を決定する際どんな人と相談しているのか

- 5 具体的な進路（受験校）を決定したのはいつか
 - 6 受験生活に対し満足している学生の特徴は何か
- これらの結果から有効的な進路指導について考察する。

4. アンケート調査の概要

調査日時は2005年2月1日の授業「留学生活」の時間を使って行った。調査対象者は出席者の中で進学希望である30名（Aクラス9名、Bクラス10名、Cクラス11名）⁴⁾である。名前を明記させ、研究資料として使用することを伝えて実施した。時間制限は設けなかった。質問はQ1からQ13まであり選択形式で問うた。Q1からQ3は来日前について、Q4からQ13は来日後についての質問である。来日前、来日後がわかりやすいようQ1の前に「あなたが日本に来る前のことについて教えてください。」と書き、Q4の前にも「あなたが日本に来てからのことについて教えてください。」と書いた。質問表は資料として本稿末に掲げる。

調査時にすでに1校以上の大学、大学院を受験した学生は27名、受験していない学生は3名であった。進路先についてはまだ14名が未確定の状態であった。今回の調査は対象者が30名と少ないことから、なるべく多くの情報を得るため質問単位での有効回答を調査対象とした。調査対象者が少ないこと、パイロット調査としての位置づけであることから統計処理は行わなかった。

5. アンケート調査結果と考察

5-1 別科生は来日前にどんな受験意識をもっているのか

来日前の受験意識を見るために以下の3つの問いに以下の選択肢を設け質問した。

Q1 日本に来る前、日本の大学や専門学校についてどのように情報を入手しましたか。

- 1 日本にいる知人や日本について詳しい人から話を聞いた

留学生の進路決定に関する調査報告

- 2 日本の大学や専門学校について書いてある本やインターネットを読んだ
 - 3 留学専門の会社などに行って話を聞いた
 - 4 とくになにもしなかった。またはなにもできなかった
 - 5 そのほか()
- Q2 日本に来る前に、別科修了後の2005年からの進路についてどう考えていましたか。
- 1 具体的には何も考えていなかった。(よくわからないので日本に行ってから考えようと思った。)
 - 2 勉強したい学部などは少しは決めていた。(詳しいことは日本に行ってから考えようと思った。)
 - 3 行きたい大学や専門学校などを具体的に決めていた
 - 4 そのほか()

- Q3 日本に来る前に、別科修了後の2005年からの進路について家族や国の先生と相談しましたか。
- 1 よく相談した
 - 2 少し(1, 2回くらい)相談した
 - 3 相談しなかった

Q1からQ3の結果が表1、表2、表3である。表の回答は選択率の高い選択肢順に並べた。

表1 Q1 日本に来る前、日本の大学や専門学校についてどのように情報を入手しましたか。(人)

回 答	クラス			合計
	A	B	C	
1 日本にいる知人や日本について詳しい人から話を聞いた	2	9	8	19
2 日本の大学や専門学校について書いてある本やインターネットを読んだ	5	0	1	6
4 とくになにもしなかった。またはなにもできなかった	1	0	2	3
3 留学専門の会社などに行って話を聞いた	1	0	0	1
5 そのほか	0	1	0	1
合 計	9	10	11	30

Q1で選択肢「5そのほか」の欄に「国の日本語の先生」「(国の)大学の指導教員」などの記述があったが、これらは選択肢「1知人」と考え計算した。Bクラスの「5そのほか」を選んだ学生は質問に対応した答えではないので、無効とした。この結果から、Aクラスは本やインターネットから多くの情報を得ており、それ以外のクラスの学生は他人からの情報が多いことがわかる。

表2 Q2 日本に来る前に、別科修了後の2005年からの進路についてどう考えていましたか。(人)

回 答	クラス			
	A	B	C	合計
2 勉強したい学部などは少しは決めていた。(詳しいことは日本に行ってから考えようと思った。)	7	6	4	17
3 生きたい大学や専門学校などを具体的に決めていた	1	3	4	8
1 具体的には何も考えていなかった。(よくわからないので日本に行ってから考えようと思った。)	1	1	3	5
4 そのほか	0	0	0	0
合 計	9	10	11	30

表2の結果をみると希望進路については具体的な大学まで考え来日した学生はAクラスよりもBCクラスのほうが多い。

表3 Q3 日本に来る前に、別科修了後の2005年からの進路について家族や国の先生と相談しましたか。(人)

回 答	クラス			
	A	B	C	合計
1 よく相談した	3	6	9	18
2 少し(1, 2回くらい)相談した	4	3	0	7
3 相談しなかった	2	1	2	5
合 計	9	10	11	30

これらの結果から、来日前に多くの別科生は知人や家族、国の教師と相談をし、自分が希望する学部程度は決めて日本に来ることがわかる。クラス

留学生の進路決定に関する調査報告

別にみると、上級クラスであるAクラスの学生が来日前に進学先の情報を本やインターネットからも得ており、より一般的で公正な情報を得ようとしていることがわかる。Bクラス、Cクラスでは知人からの情報が中心となっている。その内訳は日本国内外にいるアドバイザーや日本にいる親類などの知人から情報を得ることが多いと思われる。

4月に行った進路希望調査では2名の学生を除いて希望の大学名、学部名まで記入している。Aクラスでは13名中5名が文教大学を第一希望としており、B、Cクラスに関しては全員が文教大学を第一希望としている。具体的な学部まで決めて来日した学生は8名しかいないにも関わらず22名、全体の73%が文教大学を第一希望に記入したことから、この4月の調査はいろいろな情報を持たないまま来日して答えたものだと言えよう。希望学部に文教大学教育学部など留学生が入学不可能な学部名を書いているものもあり、本学の入試についても情報を十分持ち合わせえていないこともわかる。文教大学の別科生だからという意識から十分に考えずに文教大学の名前を記入したのであろう。

これらのことから、別科入学前により十分な文教大学に関する情報を与える必要があることがわかる。別科では「外国人留学生別科学校案内」を作成し、募集要項とともに配布しているが、その内容の再検討も必要であろう。

また、行きたい学校を決めてきた学生の中には有名国立大学や有名私立大学を挙げる学生もいる。ある程度英語力がある人間は1年間日本語を勉強すれば有名国立大学に入れると知人から聞いたと相談に来た学生もいた。このような例も情報の不正確さと不足から来るものだといえる。留学生は大学受験に関する情報と自分の日本語力を正確に把握する必要がある。来日前からこのような情報を把握するのは難しいが、現在はインターネットによる情報検索も可能である。日本学生支援機構ホームページ上の「日本留学情報ページ」を留学生に紹介するなどの情報に関する対応が可能であろう。

5-2 進路（受験校）を決定する基準は何か

次に、別科生が受験校を決めるときに何を基準に決めているかをQ8、Q11の2つの質問から見てみる。質問は次のとおりである。

Q8 受験希望校を選ぶときにどんなことを重視して考えましたか。（複数回答）

Q11 受験希望校を決定するとき一番重視したことは何ですか。1つ選んでください。

Q8とQ11の選択肢は同じもので「1学費」、「2学校の場所」、「3試験日」など相談時に学生から出てきたキーワードを中心に設定したものに自由記述式の「14そのほか」を加えた14の選択肢である。Q8の有効回答数は30、Q11の有効回答数は複数を選択した誤答を除いたため25である。Q8の結果を表したのが表4である。回答は選択された選択肢のみ選択率の高い順に並べる。

表4 Q8 受験希望校を決定するとき一番重視したことは何ですか。1つ選んでください。（人）

回 答	クラス			合計
	A	B	C	
5 勉強したい学科・学部か	4	2	9	15
6 将来性があるか、就職に有利か	1	4	0	5
1 学費	1	0	1	2
4 有名度・知名度	1	0	0	1
2 学校の場所	0	1	0	1
12 先生の評価が高い学校か	0	0	1	1
合 計	7	7	11	25

当然といえるだろうが受験校を決定するとき「5勉強したい学科・学部か」を最優先して受験校を決定したということがわかる。Bクラスでは「6将来性があるか、就職に有利か」を最優先した学生が最も多くなった。

では、第2、第3の基準とはどのようなものだろうか。Q11でQ8と同じ選択肢で複数回答可とした場合の結果が表5である。選択された選択肢のみを選択率の高い順に並べる。

留学生の進路決定に関する調査報告

表5 Q11 受験希望校を選ぶときにどんなことを重視して考えましたか。

(複数回答可)(人)

回 答	クラス			合計
	A	B	C	
5 勉強したい学科・学部か	8	8	11	26
6 将来性があるか、就職に有利か	4	7	5	16
1 学費	6	4	5	15
2 学校の場所	5	5	5	15
7 日本留学試験の科目や点数が自分に適当か	2	5	4	11
4 有名度・知名度	5	2	2	9
10 家族や親戚が賛成するか	0	3	4	7
3 試験日	2	2	2	6
8 試験科目・試験が簡単かどうか	1	2	1	4
13 知人や先輩がいるか	0	1	2	3
12 先生の評価が高い学校か	1	0	1	2
9 説明会などの学校の雰囲気	0	1	1	2
11 知人や友人の評価が高い学校か	0	0	1	1

Q11の結果、最も多くの学生が重視したことは「5勉強したい学科・学部か」次に「6将来性があるか、就職に有利か」であった。これは最も重視した項目と変わらない。3番目には、「1学費」そして「2学校の場所」が来ている。これはどちらも経済的な問題と関係するものである。学校の場所によっては費用のかかる引越しをしなければならない。面談時には引越しをするとアルバイトを変えなくてはいけない、都心から離れるとアルバイトが少ないのではないかと危惧する学生もいた。文科省が行った「平成13年度私費外国人留学生学生生活実態調査」によると2001年度の私費留学生のアルバイト平均月額は52千円と報告されている。本学別科生も2004年7月の面談時約90%の学生がアルバイトをしていた。経済的安定は精神衛生上にも影響を及ぼす。先行研究でも経済と学業との相関関係を指摘しているものがある。植田ほか(2004)は教員の留学生に対する意識調査を行い、指導に成功した学生、失敗した学生について述べており、その中で奨学金の有無が指導の成功、失敗に影響を与えているとしている。

これは大学院生についての調査であるが、留学生にとっては別科生も大学院生も経済が留學生活の成功を左右する一因といってもよいだろう。

進路指導の際には、大学の学費だけではなく授業料免除制度や奨学金制度についての詳しい情報が必要である。

5-3 進路を決定する際どこから情報を得ているのか

では、このような基準で受験校を選ぶときの情報はどこから得ているのだろうか。来日前に情報を得ていた知人、インターネットなどのほかに、来日後には学校説明会などにも参加している。多くの情報から学生はどの情報源を選び、どこからの情報が実際に役に立ったと感じているのかをQ9とQ10の回答から考察する。Q9とQ10の選択肢は同じもので、「1日本にいる知人・友人・先輩・先生」、「2国にいる知人・友人・先輩・先生」、「3文教大学の先生」、「4雑誌・本」、「5インターネットの学校のホームページ」、「6学校説明会・オープンキャンパス」、「7電車内や新聞などの広告」に自由記述式の「8その他」を加えた8つである。Q9では以下の質問で情報源について多くの情報を得たものを選択肢の中から上位3つ選ばせた。

Q9 この一年間、進路に関する情報はどこから得たものが多いですか。

の中から多い順に3つ選んで()の中に数字をかいてください。

1番に選ばれたものを3点、2番目を2点、3番目を1点として計算した結果が表6である。またQ9において一番多くの情報を得たものには選ばれたものだけを見たものが表7である。表7は選択された選択肢のみを選択率の高かった順に表にする。有効回答数は29である。

この結果から最も多くの情報量を得ているのは日本にいる知人や友人からであり、その総合的な情報量も多い。他人からの情報が最も多いことがわかる。学校説明会や雑誌・本などは上位3位までには選ばれるが、1位には選ばれておらず、他人からの情報の補助的、確認的なものとして扱われていると思われる。情報源についてはクラスによって差が見られる。

留学生の進路決定に関する調査報告

表6 Q9 この一年間、進路に関する情報はどこから得たものが多いですか。

(上位3まで：点数)

回 答	クラス			合計
	A	B	C	
1 日本にいる知人・友人・先輩・先生	7	23	26	56
3 文教大学の先生	16	20	9	45
5 インターネットの学校のホームページ	19	9	10	38
2 国にいる知人・友人・先輩・先生	0	5	10	15
6 学校説明会・オープンキャンパス	5	0	4	9
4 雑誌・本	4	0	0	4
7 電車内や新聞などの広告	0	3	0	3

表7 Q9 この一年間、進路に関する情報はどこから得たものが多いですか。

(1位のみ：人)

回 答	クラス			合計
	A	B	C	
1 日本にいる知人・友人・先輩・先生	1	4	7	12
3 文教大学の先生	2	5	3	10
5 インターネットの学校のホームページ	5	0	0	5
2 国にいる知人・友人・先輩・先生	0	1	1	2
7 電車内や新聞などの広告	8	10	11	29

Aクラスはインターネットや教師の点数が日本にいる知人・友人よりも高く、Bクラスでは教師の点数も高いが、インターネットの点数は高くない。Cクラスでは日本にいる知人・友人が教師やインターネットなどを引き離している。これは2つの可能性が考えられる。1つはAクラスは来日前にも本やインターネットを利用して情報を得ており、元々そのような情報収集手段を好む人間が多いという可能性である。ただし、4月に情報処理のオリエンテーションを行った際、母国でのパソコンによるインターネットやEメールの利用状況や、パソコンの使用頻度について質問したが、クラスによる違いはみられなかった。このことからもう1つの可能性として日本語能力との関係が考えられる。Cクラスではインターネットの情報を読み取ったり、日本人の教師と話をしたりというのは能力的に難しく、

母国語の通じる知人や友人に相談する傾向が強いとするものである。来日前にも日本語能力差は予想されることから、日本語能力によって情報収集手段に違いがあることが予想される。

次に、これらの得た情報の中で、役に立ったと思われる情報の情報源はどこであろうか。Q10においてQ9と同じ選択肢を用い聞いた。

Q10 この一年間、進路を決めるときに役に立った情報はどこからの情報ですか。

の中から3つ選んで()の中に数字をかいてください。

Q9と同じように上位3位までを選ばせ、最も役に立ったと思われるものを3点、2番目を2点、3番目を1点として点数を出してみると以下の表8のようになる。選択された選択肢だけを選択率の高かった順に表にする。有効回答は28である。

表8 Q10 この一年間、進路決めるときに役に立った情報はどこからの情報ですか。
(上位3まで：点数)

回 答	クラス			合計
	A	B	C	
1 日本にいる知人・友人・先輩・先生	10	21	22	53
3 文教大学の先生	16	21	9	46
5 インターネットの学校のホームページ	22	10	8	40
2 国にいる知人・友人・先輩・先生	0	3	8	11
6 学校説明会・オープンキャンパス	3	0	5	8
4 雑誌・本	3	4	0	7

もっとも役に立った情報だけを取り出した結果は表9のとおりである。選択された選択肢だけを選択率の高かった順に表にする。

この結果は情報量と同傾向を示している。情報量と同じように、Aクラスではインターネットのホームページが最も役に立つ情報であり、Bクラスは教師と知人、友人の情報であり、Cクラスでは知人・友人の情報が最も役に立つという結果になった。日本語能力により情報源が違うだけでなく、自分にとって有効だ、役に立つと考える情報源もちがう。日本語能力

留学生の進路決定に関する調査報告

表9 Q10 この一年間、進路決めるときに役に立った情報はどこからの情報ですか。
(1位のみ:人)

回 答	クラス			
	A	B	C	合計
1 日本にいる知人・友人・先輩・先生	2	5	4	11
3 文教大学の先生	3	4	3	10
5 インターネットの学校のホームページ	3	0	1	4
2 国にいる知人・友人・先輩・先生	0	1	1	2
6 学校説明会・オープンキャンパス	0	0	1	1
合 計	8	10	10	28

により情報源が異なることも指導上の留意点である。ときには情報源となる学生の知人や友人とも連絡を取り合い、進路指導を進めたほうがよいケースも考えられる。

5-4 進路を決定する際どんな人と相談しているのか

では、情報を得て、どのような人と相談をし、進路を絞っていくのだろうか。もちろん、相談しながら情報を得ることも多いだろう。この項では「教師」「知人」「親」に相談したか、相談したならばいつごろから相談を始めたかを以下の3つの質問により考察した。

Q5 受験希望校を決めるとき、文教大の先生と相談しましたか。

Q6 受験希望校を決めるとき、日本にいる知人や先輩と相談しましたか。

Q7 受験希望校を決めるとき、国の家族と相談しましたか。

選択肢は3問とも同じもので「A何度も相談した」、「B1.2回相談した」、「C相談しなかった」の3選択肢である。またそれぞれの質問の選択肢の後にその開始時期を聞くため以下の質問をつけ開始した月を記入させた。

AとBの人に聞きます。それはいつごろからですか？ ()月ころから

Q5、Q6、Q7の有効回答は29である。無効回答は同一被験者である。まず、頻度に関係なく相談した相手だけをまとめると表10のようになる。

表 10 Q5、Q6、Q7 相談相手（人）

相談相手		クラス			合	計
		A	B	C		
1 人	教師だけ	2	0	1	3	5
	知人だけ	0	0	0	0	
	親だけ	0	1	1	2	
2 人	教師と知人	1	1	1	3	12
	教師と親	2	2	0	4	
	知人と親	2	2	1	5	
3 人	教師と知人と親	2	4	6	12	
合 計		9	10	10	29	

無効回答とした学生も何度か研究室に相談に来ていることを考えると誰にも相談せずに決めた学生はいないということがわかる。アンケート調査の結果だけを見ても教師と何らかの相談をした割合は76%、知人に相談した割合は68%、親に相談した割合は79%であった。今回の調査は母数が少ないので、この調査だけで結論を出すことは危険であるが、日本語能力の低い学生ほど多くの立場の人に相談をしている傾向があるようだ。次に相談相手と頻度を表にすると表11のようになる。

表 11 Q5、Q6、Q7 相談相手と相談頻度（人）

回答		クラス			合	計
		A	B	C		
先生と	何度も相談した	3	4	5	12	23
	1、2回相談した	4	3	4	11	
	相談しなかった	2	3	1	6	
知人と	何度も相談した	2	3	5	10	21
	1、2回相談した	3	4	4	11	
	相談しなかった	4	3	1	8	
親と	何度も相談した	5	2	3	10	22
	1、2回相談した	1	7	4	12	
	相談しなかった	3	1	3	7	

留学生の進路決定に関する調査報告

いつごろから相談を始めたかという質問に対して明確に覚えていないという回答もあり数値を出すには不十分であると判断した。参考として相談開始の月が記入されていたものだけで結果をまとめると、相談相手に関係なく、何度も相談をした学生ほど早く相談を始めている。最も早い学生で4月であった。また、相談頻度に関係なく相談を始めた人が多い月は10月であった。クラス、相談相手による違いはみられなかった。

今回は相談の内容については質問をしなかった。実際に留学生がどのような相談をどのような人にするかという調査した先行研究に大友（1998）がある。その報告によると相談内容によって相談相手も異なるが、ほとんどの相談領域で同国人同士が相談相手として選ばれていた。「先生」によく話す話題は言語習得に関するもので、プライベートなことを話しながらない傾向にあるとしている。進路については、進路決定の基準からもわかるように、自分の希望だけではなく経済的なことも関係している。個人の経済状態についてはプライベートな部分でもあり、大友（1998）の結果からも教師として進路指導をする場合、学生が問題のすべてを話していると考えるのは危険であることがわかる。勉学に関しても授業も担当している教師に対して、マイナスに取られる発言はしないと考えるのが当然であろう。教師に相談することに関しての考え方や対応の仕方は個人差や、文化差なども考えられる。4月のオリエンテーションのときから進路について教師と相談するように言っているが、定期的に全学生対象の面談を行う、だれでも気軽に相談ができる場所や時間帯を設けるなどの対策が必要だろう。

また、別科生は「教師」「親」「知人」に相談しているが、先行研究の結果からその相談内容は異なる可能性も高い。今後、相談相手によって進路相談内容に違いがあるかについての調査が必要である。そして、相談内容が違うのであれば別科生の現状や希望をより詳細に知るために別科生の人的ネットワークを把握するとともに、そのネットワークに関わっているアドバイザーなどの知人とも連絡をとり指導することが有効であると考えられる。

5-5 具体的な進路（受験校）を決定したのはいつか

Q4では進路決定時期について選択肢「4～6月」「7～9月」「10月」「11月」「12月」「1月」「そのほか（ ）」を設け以下の質問をした。

Q4 日本に来てから具体的に受験希望校を決めたのはいつごろですか。

結果は表12のとおりである。有効回答数は28である。

表12 Q4 日本に来てから具体的に受験希望校を決めたのはいつごろですか。(人)

回 答	クラス			合計
	A	B	C	
4 - 6月	2	0	0	2
7 - 9月	1	0	2	3
10月	1	1	1	3
11月	0	1	3	4
12月	1	5	2	8
1月	3	3	2	8
そのほか	0	0	0	0
合 計	8	10	10	28

受験校決定の時期をみると11月以降に決める学生が多い。11月の日本留学試験の結果は12月末に出る。Aクラスの受験校決定時期に1月が多いのは日本留学試験の結果をみて最終的に国立大学を含めた受験校を決めるためである。Bクラスで受験校決定時期が12月に多くなっているのはやはり日本留学試験の結果を考えてということと、入試の行われる時期に入り決定を迫られるためもあっただろう。Cクラスの学生は早い時期から進路を専門学校に絞る学生がある。Cクラスで7月から9月に受験校を決定した学生はいずれも専門学校だけを受験した学生である。Cクラスの学生が専門学校を選ぶ傾向として2通りある。1つは母国で大学、大学院を卒業しているので、日本では専門的な技術を専門学校で学びたいという学生、もう1つは日本の大学で勉強したいが、今の日本語力では大学に入ることが難しいので、専門学校で日本語をさらに勉強し大学に進学したいと考え

留学生の進路決定に関する調査報告

る学生である。Aクラスで4月から6月に受験校を決定したのは大学でいずれも自分の進路について具体的に強い希望を持っている学生たちであった。2月末までに受験した学校数はAクラス1人平均2.2校、最も受験数が多い学生は5校であった。Bクラスは1.5校、最も受験数が多い学生は4校、Cクラスは1.3校、最も受験数が多い学生は2校であった。

これらの結果から、多くの学生は大学入学試験が本番に突入する10月以降に、そして国立大学を考えている学生は日本留学試験の結果がでる12月以降に最終的な受験校を決定している。そして、一部の早い時期に受験校を決定する学生には自分の目的にあう大学や専門学校を選ぶ学生と、自分の日本語力から大学をあきらめて専門学校に決める学生がいることがわかった。いずれの学生も相談後に受験校を決めている。

井上(1998)は韓国人就学生に対する面接調査を実施し、職業領域におけるアイデンティティ形成パターンについて考察し、明確な目標を持たず来日した就学生は、来日後に積極的にアイデンティティ達成課題に取り組み、入りたい大学よりも入れる大学、やりたいことよりもやれること、という進路決定をしてしまうことがあるようだとしている。別科の修学年限は1年で多くの私立大受験が10月ごろから始まることを考えると別科生が受験準備に使える時間は半年程度である。別科生に来日前から目的意識をもたせ、来日直後から大学受験情報を与え早い時期に受験志望校を絞らせる必要がある。そのためにも教師、学生本人ともに日本語力を的確に把握する資料が必要であろう。

5-6 満足度の高い学生の特徴

受験生活の満足度についての回答から満足度の高い学生の特徴について述べる。まず、受験生活の満足度に関する質問Q12の結果が表13である。この問いでは以下のように3つの選択肢から該当するもの1つを選ばせた。

Q12 この1年間の受験生生活はどうでしたか。

- 1 全体的には充実していた。理想に近い生活を送った。よかった。

- 2 理想とはすこしちがったが、自分なりにがんばった。まあまあ。
- 3 もう少しがんばればよかった。理想と違った。残念。

表 13 Q12 この1年間の受験生生活はどうか。(人)

回 答	クラス			合計
	A	B	C	
1 全体的には充実していた。理想に近い生活を送った。よかった。	2	5	2	9
2 理想とはすこしちがったが、自分なりにがんばった。まあまあ。	4	3	8	15
3 もう少しがんばればよかった。理想と違った。残念。	2	2	1	5
合 計	8	10	11	29

そして、表 14 は表 13 で「1 よかった」を選択した満足度の高い学生と「3 残念」を選択した低い学生のそれぞれの調査結果から相談相手について比較したものである。どちらも有効回答数は 29 である。

受験生活に満足を選択した学生の中には希望校に進学できなかった学生も含まれており、満足度は希望校への進学という結果だけではないことがわかる。

表 14 Q5、Q6、Q7、Q12 満足度のちがいと相談相手と相談頻度(人)

相談相手	回 答	満足度が高い	満足度が低い
先生と	何度も相談した	6	1
	1、2回相談した	2	1
	相談しなかった	1	3
知人と	何度も相談した	3	2
	1、2回相談した	3	1
	相談しなかった	3	2
親と	何度も相談した	5	2
	1、2回相談した	2	2
	相談しなかった	2	1

満足度の高い学生ほど何度も相談をしながら進路を決定している。特に、教師との相談頻度にちがいがみられる。留学生の満足度に対する研究の二

留学生の進路決定に関する調査報告

宮他（1997）では短期留学生の成功感規定因子と満足規定要因を探り、「親切度」因子という教職員や周囲の日本人が親切かという度合いによって成功感や満足感に影響を与えるという結果を述べている。そして、アジア人留学生の特徴として、あまり強くはないが「指導教官」が満足感影響因子になっていると述べている。このことから指導教員との距離が留学生の心理的な安定をもたらす要因となる可能性が窺える。別科生の9割以上がアジア人留学生であることを考えると指導教員のあり方を考える必要性がある。もちろん、受験生の場合、受験生活の成功感は希望の進路獲得と結びついているもので、進路相談の頻度や内容だけでは考えられない。しかし、進路相談、つまり人的ネットワークを上手に使うことは留学生にとって満足感を与えると考えられる。

最後に進路決定に関する項目ではないが、参考資料として別科進路指導に対する改善点を聞いた。質問、選択肢は以下のとおりである。結果を表15に表す。

- Q13 別科の進路指導で改善してほしい点は何ですか。
- 1 もっと進路相談をしてほしい。
 - 2 もっと進路情報を出してほしい。（学校情報や受験情報など）
 - 3 進路指導（面接や願書の書き方など）の特別な時間を作ってほしい。
 - 4 そのほか（ ）

表15 今後の進路指導の改善点（複数回答あり）

回 答	クラス			合計
	A	B	C	
1 もっと進路相談をしてほしい	0	2	3	5
2 もっと進路情報を出してほしい。（学校情報や受験情報など）	6	5	5	16
3 進路指導（面接や願書の書き方など）の特別な時間を作ってほしい。	4	4	0	8
4 そのほか	0	0	0	0

別科生が現在もっとも望んでいる進路指導は「進学情報の提供」だということがあった。別科生の満足にたる進学情報の提供と、また日々変わる情報を別科生自らも収集できる情報リテラシー能力の育成が必要である。

6. まとめ

今回は進路決定にいたるまでのいくつかの点に関してアンケート調査を行い、その結果から進路指導に対する考察を行った。今回の調査では情報源として、また相談相手としての人的ネットワークが重要であることが示唆された。また学生の受験生活の満足感には相談頻度などとの関係が窺えた。相談相手として教師、親、知人を対象に見てきたが、学校での学生の相談の場として、学生相談室の存在がある。学生相談室は96年の調査⁵⁾では国立大学で74.7%、私立大86.5%と多くの大学で設置されている。しかし、留学生の相談を想定して留学生専用の相談室を設けている大学は国立大学で28.9%、私立大学で6.3%と少ない。文教大学にも学生相談室があるが、別科生はその存在を知らないのが現状である。田中(1993)は留学生の相談領域として異文化カウンセリング、心理相談、健康相談、話し相手、進路相談、語学、学業、問い合わせ、要望の8つに分類し、日本人学生には見られない領域の存在を指摘している。留学生の指導、アドバイスには専門的なカウンセリング知識も必要である。今後は別科担当教員だけではなく学内機関、またアドバイザー等と連携しあってより充実した生活・進路指導を行える体制を整えていかなければならない。また、情報収集の面からも対応が必要である。今日は大学改革の時代といわれ、大学の入試も年々多様化し、さまざまな方式による入学者選抜が行われている。この日々変わる情報をすばやく入手し、的確に理解する力が別科生にも指導教員にも必要である。教師が学生の希望進路を早い時期に把握すると同時に、学生の持っている人的ネットワークや背景についても情報を収集し、周囲の人々と協力しながら学生の進路指導にあたる必要がある。

別科生のほとんどが進学のために日本留学試験と大学入学試験を受験す

留学生の進路決定に関する調査報告

るという過程は同じであるが、それぞれが希望の進路を持っており、決して受験に関する問題は一樣ではない。日本語力、進学希望大学、そしてもっている文化背景が異なる。積極的に人に相談するか否かなどは個人の性格的な差異もあるだろう。それぞれに適切な指導内容、時期、方法がある。このような点を考えると今回の調査だけでは指導を考える資料として不十分である。しかし、一つでも多くの実態を記述し積み重ねることがより別科生にあった指導内容を考える一つの方法になると考える。今後も様々な面から別科生の進路に関する調査を行い学生にとってどのような指導が有効か考察を深めたい。

注

- 1) 『2004～05 私立大学留学生別科要覧』2003日本私立大学団体連合会編p13
- 2) 田中共子1993「『留学生』相談の領域」『学生相談研究』14 p34
- 3) 文部科学省HP上発表「留学生受入れの概況(平成16年版)」による
- 4) Aクラスが最も日本語能力の高いクラス、Cが最も低いクラスである
- 5) 伊藤武彦・井上孝代1998「全国高等教育機関の留学生相談の実態調査」『留学生の中途退学に関する異文化間臨床心理的研究』

参考文献

- 安達一雄2002「外国人留学生の日本語能力と異文化適応について」『留学生教育』第7号
- 伊能裕晃2004「日本語学校における就学生支援 - 必要となる認識、活動、組織についての提言 - 」『留学生教育』第9号
- 井上晶子1998「韓国人就学生のアイデンティティ形成と異文化接触」『留学生の中途退学に関する異文化間臨床心理的研究』
- 井上孝代他1998『留学生の中途退学に関する異文化間臨床心理学的研究平成8.9年度科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書』
- 伊藤武彦・井上孝代1998「全国高等教育機関の留学生相談の実態調査」『留学生の中途退学に関する異文化間臨床心理的研究』
- 大友可能子1998「在日外国人留学生のカウンセラーについて」『留学生教育』第3号
- 田中共子1993「『留学生』相談の領域」『学生相談研究』14
- 槌田和美・林高行・廣瀬幸夫2004「理工系大学院における留学生施策への提言 - 2002年度東京工業大学留学生満足度調査アンケートの分析より - 」『留学生教育』第9号

二宮皓・黄帆 1997 「短期留学生の成功・満足規定要因に関する基礎的研究」『留学生教育』第2号

松原達哉・石隈利紀 1993 「外国人留学生相談の実態」『カウンセリング研究』26

横田雅弘 1990 「激増する留学生と国際交流アドバイザーの必要性」『学生相談研究』

Vol11 No2

資料 アンケート

アンケート 進路について

名前 _____ クラス 3 () ・ 5 ()

進路調査

- ・ あなたは 今まで 何校 受験しましたか。 _____ 校
- ・ 進学する 学校は 決まりましたか。 はい ・ いいえ
「はい」の人だけに聞きます。進学が決まったのはいつですか。
・ 9月前 ・ 10月 ・ 11月 ・ 12月 ・ 1月 ・ 2月

あなたが日本に来る前のことについて教えてください。

Q1 日本に来る前、日本の大学や専門学校についてどのように情報を入手しましたか。

- 1 日本にいる知人や、日本について詳しい人から話を聞いた。
- 2 日本の大学や専門学校について書いてある本やインターネットを読んだ。
- 3 留学専門の会社などに行って、話を聞いた。
- 4 とくになにもしかなかった。または なにもできなかった。
- 5 そのほか ()

Q2 日本に来る前に、別科修了後の2005年からの進路についてどう考えていましたか。

- 1 具体的には何も考えていなかった。
(よくわからないので日本に行ってから考えようと思った。)

留学生の進路決定に関する調査報告

2 勉強したい学部など少しは決めていた。

(詳しいことは日本に行ってから考えようと思った。)

3 行きたい大学や専門学校などを具体的に決めていた。

4 そのほか()

Q3 日本に来る前に、別科修了後の2005年からの進路について家族や国の先生と相談しましたか。

1 よく相談した。

2 少し(1.2回くらい)相談した。

3 相談しなかった。

あなたが日本に来てからのことについて教えてください。

Q4 日本に来てから具体的に受験希望校を決めたのはいつごろですか。

・4～6月 ・7～9月 ・10月 ・11月 ・12月 ・1月・そのほか()

Q5 受験希望校を決めるとき、文教大の先生と相談しましたか。

A 何度も相談した B 1.2回相談した C 相談しなかった。

AとBの人に聞きます。それはいつごろからですか? ()月ころから

Q6 受験希望校を決めるとき、日本にいる知人や先輩と相談しましたか。

A 何度も相談した B 1.2回相談した C 相談しなかった。

AとBの人に聞きます。それはいつごろからですか? ()月ころから

Q7 受験希望校を決めるとき、国の家族と相談しましたか。

A 何度も相談した B 1.2回相談した C 相談しなかった。

AとBの人に聞きます。それはいつごろからですか? ()月ころから

Q8 受験希望校を選ぶときにどんなことを重視して考えましたか。(複数回答可)

- 1 学費
- 2 学校の場所
- 3 試験日
- 4 有名度・知名度
- 5 勉強したい学科・学部か
- 6 将来性があるか、就職に有利か
- 7 日本留学試験の科目や点数が自分に適当か
- 8 試験科目・試験が簡単かどうか
- 9 説明会などの学校の雰囲気
- 10 家族や親戚が賛成するか
- 11 知人や友人の評価が高い学校か
- 12 先生の評価が高い学校か
- 13 その学校に知人や先輩がいるか
- 14 そのほか ()

Q9 この一年間、進路に関する情報はどこから得たものが多いですか。 の中から多い順に3つ選んで () の中に数字をかいてください。

- 1番 たくさんの情報をもらったもの ()
- 2番目に たくさんの情報をもらったもの ()
- 3番目に たくさんの情報をもらったもの ()

Q10 この一年間、進路を決めるときに役に立った情報はどこからの情報ですか。 の中から3つ選んで () の中に数字をかいてください。

- 1番 役に立った情報 ()
- 2番目に役に立った情報 ()
- 3番目に役に立った情報 ()

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1 日本にいる知人・友人・先輩・先生2 国にいる知人・友人・先輩・先生3 文教大学の先生4 雑誌・本5 インターネットの学校のホームページ6 学校説明会・オープンキャンパス7 電車内や新聞などの広告8 そのほか () |
|--|

